

論文概要

セントルシアにおける地域社会の協働構造—人々の関係性と文化的実践の観点から—

菊池香奈子

研究の目的と方法

カリブ海の小島嶼開発途上国の一つであるセントルシアは、植民地支配の歴史に起因する二重の文化構造や、小規模国家特有の地理的孤立性、経済的脆弱性、気候変動リスク、外部依存型の産業構造、制度的脆弱性による行政能力の制約などの課題を抱えている。これまでの国際協力の文脈では、こうした条件に対し、行政能力の強化や制度的枠組みの整備が重視されてきた。

筆者は、2022年から2024年にかけて、JICA海外協力隊として、セントルシア公平・社会正義・エンパワメント省社会福祉局（The Division of Human Services）に配属された。その活動の一環として、「Survey of Public Awareness of Child Abuse Prevention, Adoption and Foster Care」を現地で実施した。調査は対面インタビュー方式で500人に実施し、児童虐待を早期に発見し通告する義務について一定の認識が確認された一方で、通告側のプライバシーが守られないことへの懸念（50.6%）や行政への不信が、通告が遅れる要因として挙げられていた。また、制度についての認識が不足しているとする回答が60.4%に上る一方、児童虐待の予防において地域包括的な仕組みが有効であるとする回答も41.6%確認された。

地域住民へのインタビューでは、行政機関と地域社会の乖離に関する多くの語りと、行政とコミュニティの協働の必要性についての訴えを多数確認した。これが、研究の出発点である。加えて、既存の報告書でも、カリブ地域における一般的な信頼が相対的に低いことが確認された。

従来、協働は信頼や共通の目的といった安定した基盤に支えられて成立すると理解された議論が多かった。しかし、セントルシアの地域社会では、歴史的な文脈に由来する分断や不信を内包する関係性のもとで、協働が成立している。こうした現象は、能力強化や制度的支援を主軸とする既存の枠組みでは十分に説明されてこなかった。そこで、本研究は、セントルシアの地域社会を事例に、人々の関係性に着目し、日常的な文化的実践を通じて成立する協働構造を明らかにすることを目的とした。

研究方法として、まず文献調査を行い、セントルシアの現状、歴史的・文化的文脈、ならびに協働に関する先行研究を整理した。次に、地域もしくは何らかのコミュニティを代表する役割を担い、地域社会の動きを把握し得る立場にある人物としてコミュニティリーダー10名を対象に、半構造化インタビューを実施した。インタビュー対象者は、可能な限り偏

りを避けるため雪だるまサンプリングで選定し、時差を考慮し対象者の希望に合わせてオンラインで実施した。インタビューで得られたデータは、社会的文脈における人々の関係の配置と働き、また構造的意味を解釈するために質的構造分析を採用した。その後、質的クロス分析で、複数の語りを体系的に整理しテーマごとに事例間の共通点及び差異について比較を行った。

論文の構成

第1章 序論

- 1.1 研究の背景と問題の所在
- 1.2 研究の目的
- 1.3 研究方法
- 1.4 本論文の構成

第2章 セントルシアの歴史的・文化的文脈—生活空間と社会秩序の形成—

- 2.1 セントルシア概要
- 2.2 クレオール文化—生活の場で形成される文化的実践—
- 2.3 植民地支配と階層性—社会秩序を構成する要素—
- 2.4 宗教組織と地域社会：—宗教組織とその役割—

第3章 セントルシアにおける統治と地域社会の変容—媒介の働き—

- 3.1 セントルシアの国家戦略
- 3.2 媒介機能—制度と地域の繋がり—
- 3.3 媒介者の役割
- 3.4 国家機能の停滞と地域社会のレジリエンス
- 3.5 協働の歴史的変容

第4章 理論的枠組みと分析の視点

- 4.1 協働とは何か
- 4.2 関係性の理論—関係性の構造と生成—
- 4.3 歴史的・文化的文脈—植民地主義の遺産とアイデンティティの生成—
- 4.4 分析の視点

第5章 インタビュー調査結果—協働構造の基盤となる関係分析—

- 5.1 インタビュー調査の概要
- 5.2 インタビュー結果の基礎分析（質的構造分析）
- 5.3 インタビュー結果の横断的分析（質的クロス分析）

第6章 総合考察

- 6.1 インタビュー調査結果の概要
- 6.2 関係の生成

6.3 関係の媒介

6.4 関係の再構成

第7章 結論と今後の課題

7.1 結論

7.2 今後の課題

謝辞

参考文献

参考資料1

論文の概要

本論文は、カリブ海に位置する小島嶼開発途上国セントルシアを事例とし、歴史的・文化的文脈の中で形成されてきた人々の関係性と文化的実践に着目し、地域社会に内在する協働構造を明らかにしたものである。

第1章では、筆者の JICA 海外協力隊での活動を踏まえて確認した問題意識を起点に、研究の背景としてセントルシアが小島嶼開発途上国として抱える課題を整理し問題の所在を設定した。

第2章では、セントルシアの地理的条件、植民地支配の二重性、政治体制、統治制度、経済構造、行政能力の制約を整理し、国家としての構造的特徴を確認した。そのうえで、クレオール文化の形成過程と構造的特徴を検討し、アビタシオンとしての生活空間、Kwéyòl (セントルシア・クレオール語) の言語実践、ラ・ウォズおよびラ・マルグリットの結社、クレオール・デーなどの祝祭が、地域社会における関係性と社会秩序の形成にどのように関わってきたのかを確認した。さらに、植民地支配に由来する階層性、権威観、言語の使い分けが人々の距離感や沈黙の慣習に影響を与えていることを整理し、宗教組織、とりわけカトリック教会と大衆カトリックが地域社会の基盤として機能してきたことを示した。

第3章では、国家戦略および制度的枠組みを確認したうえで、制度と地域社会をつなぐ媒介機能に焦点を当てた。制度的媒介、非制度的媒介、人的媒介の三層を整理し、媒介者が制度と地域を横断する存在として果たす役割を検討した。また、ハリケーン・トマスや COVID-19 といった危機において国家機能が停滞するなか、地域社会がどのように対応し、協働の営みがどのように展開されたのかを分析し、協働のあり方の歴史の変容を整理した。

第4章では、協働と関係性に関する理論的枠組みを提示し、歴史的・文化的文脈を踏まえたうえで分析の視点を設定した。本研究では、関係性を構造として捉え、「関係の生成」「関係の媒介」「関係の再構成」という三つの視点を分析軸とした。

第5章では、セントルシアの地域社会を担うコミュニティリーダー10名を対象に実施した半構造化インタビュー調査の結果を示した。調査はオンラインで実施し、語りを逐語化し

たうえで分析を行った。分析では客観性を担保するため、四つのステップによる分析の多角化を行い、データの網羅性と逐次性を確認した。まず質的構造分析により、各ケースにおける人々の関係の配置を整理し、協働に関わる相互行為の構造、当事者による意味づけ、地域社会において果たされている機能を抽出した。具体的には、家族・親族・親しい友人といった強い紐帯を基層とし、宗教者やコミュニティリーダーなどが中間層として位置づけられ、公的機関へと接続される関係の構造が確認された。また、政治的対立や関係過多、小規模社会特有の距離感が、情報共有や支援要請のあり方に影響を及ぼしていることが示された。その後、質的クロス分析を用いて10事例を横断的に比較し、共通性と差異を整理した。共通点としては、まず家族、親族と親しい友人から相談が始まり、必要に応じて媒介者を経て制度へと接続される段階性が確認された。一方で、コミュニティの活動領域や地域条件により、公的機関との接続の程度や媒介者の関与のあり方に差異がみられた。

第6章では、以上の結果を三つの分析視点から総合的に検討した。第一に、関係の生成は日常的な生活空間を通じて形成されていること、第二に、関係の媒介では媒介者が連結機能と調整機能を担っていること、第三に、関係の再構成では協働が課題解決の局面で立ち上がり、状況に応じて関係のあり方が変化しながら再編される特徴を有していることを明示した。

第7章では、結論として、セントルシアの協働構造は、制度的枠組みや一般化された信頼に依拠して固定的に成立するものではなく、歴史的・文化的文脈に埋め込まれた日常的な生活空間において、人々の関係性が生成・媒介・再構成されることによって成立する動的構造であることを提示した。協働の構造として、強い紐帯を基層とし、宗教者やコミュニティリーダー等の媒介者を通じて制度へと接続される段階的配置をとりつつ、課題の発生に応じて一時的に立ち上がり、状況の変化とともに関係の形態を変容させながら維持される点にその特質がある。加えて、本研究では達成できなかったことを、今後の課題として三点に整理した。第一に、定量調査による構造的差異の要因究明である。コミュニティリーダー（CL）10名への質的調査には限界があるため、生活空間への関与頻度や媒介者との接触経験などを指標化し、地域差や不信の程度を統計的に把握することで、質的知見の検証と構造理解の深化が求められる。第二に、媒介機能の限界と持続性の検討である。無報酬・非制度的な人的媒介の持続可能性や、政治的分断・制度的脆弱性の影響を長期的視点から評価する必要がある。第三に、他地域への応用可能性の検討である。生活空間（アビタシオン）において不信を内包しながら関係が維持される構造について、他のカリブ地域や小島嶼開発途上国との比較を通じて、その分析視点の有効性を検証することが課題である。

本研究は、セントルシアの地域社会における協働を、制度的枠組みや安定した信頼の有無によって説明するのではなく、クレオール文化や宗教に根ざした生活空間での実践を背景に、「関係の生成・媒介・再構成」という視点から捉え直したものである。また、コミュニティリーダー10名を対象としたインタビューにもとづき、質的構造分析によって各事例の関係構造を抽出・構造化し、さらに質的クロス分析によって共通点と差異を比較するという

分析過程を通じて、協働を動態として把握し、その構造的特徴を明らかにした。

その結果、セントルシアにおける地域社会の協働は、一般的な信頼や制度によって固定的に成立するものではなく、歴史的・文化的文脈に埋め込まれた生活空間において、人々の関係性が状況に応じて再編されながら生成・媒介・再構成される動態的構造として理解されるべきものであることを示した。以上より、本研究は、制度や能力の外部的導入を前提とする国際社会開発の理解を相対化し、セントルシアの地域社会に内在する人々の関係性と文化的実践に着目することで、協働を「人々の関係の生成・関係の媒介・関係の再構成」という動態的構造として捉える視座を提示したものである。